

関通上人と持戒

深 貝 順 太 郎

雲介子関通は徳川中期より末期（一七九六—一七六五）にかけての僧である。①捨世僧ではあるが、単に隠遁念仏に終始せずして諸国を遍歴し、布教に、建立に大いに活躍し、所謂墨染の沙門として大衆に接したのであつた。その豊かなる宗乗学的知識と別時念仏を嚴修する事によつて得た宗教的体験と、加えて天性巧みな弁舌を以てした説法勸導には、諸人稻麻竹草の如く化に帰したと云う。

今、著述に依り関通の生涯を見る時、それは専修念仏の実践とその布及にあつた事が知られるが、一例をあげれば、自制策誠追録には次の如く記している。

予は宗祖円光大師の教勸に、毫も違する事なし、先ず深く因果のことはりを信じ、露も身命を顧りみず。

扱安心に至りては、財色二欲を制伏して機法二種の

御釈を深く信決して、我身を卑下謙退して、称名の外余業を雑修せず、単信に称名す、是我随自の正意なり。これを見ても解るやうに、関通の講説は終始一貫、厭離穢土欣求浄土を説くにあり、現世を極端に厭い、往生極楽の念を起さしめるやうに、純粹浄土宗学的立場よりなされているのである。そこには当然、元祖の正統を受けついでそれを布衍せんとする還法然の姿が明らかに見られる。故に自ら吉水正統勸進沙門一向専称阿彌陀仏関通と称することも首肯されよう。

是く云うものの、彼の行業を見る時、相当強く持戒を勧めている事が注目しに値いする。一向専称阿彌陀仏の関通が何故に持戒を勧めたかについては少しく考える必要もあるう。

今幸いに、関通の著述である専修念仏者持戒討論には、

この事が述べられているから、ここでは、それを要約する事により関通の持戒に対する見方を知りたいと思う。

即ち専修念仏者が殊更に菩薩戒を結縁授受するについての理由に、関通は簡と別の二由をあげて弁じている。

簡に四機をあげ、いずれも邪義であるとするが、以下それを略述すれば次の如くである。

一、持戒念仏難行の機（在出に通ず）

主張 戒を保つて念仏すればこそ往生する。

関通 本願は三学無分、出離無縁の機を先として十方衆生と願ひ、行は乃至十念と万行諸善を選捨て唯称の一行を誓約されたのである。

二、持戒念仏名利の機（出家に限る）

関通 名聞利養の為に持戒すれば、渡世誑惑にして、無力の大賊である。

三、持戒念仏兼行の機（在出に通ず）

主張 戒は右足の如く、念仏は左足の如しと云い、本願の独立を許さない。

関通 宗門の意は、願行具足にして畢竟念仏者は本願他力の往生である。喻えば船に乗るに足の強弱

を論じようか。

四、持戒念仏邪雜の機（在出に通ず）

主張 持戒を根本として、無戒破戒の往生を許さない。
関通 如来の本願には、戒の有無、持破の区別はない。却つて三学無分を損機としたまうからである。

以上が所誡の四機として関通が述べる所のものである。次に、別に二を分け、一つには持戒は仏弟子（在出に通ず）の通規である旨を述べ、二には六機をあげて、これに叶うものは専修念仏者に叶うと云う。次に略述する

一、持戒念仏純善業成の機

この機は雜りものなしの善い事揃いを云う。諸善万行は大凡そ止善と行善に分れるが、今は称名念仏を障えない止善を云う。

二、持戒念仏順教の機

この機は如来の教に背かず念仏申す機根である。戒は万善万行にわたるもので、万善を修するには、戒を捨てるわけにはゆかぬ。

念仏の行者のみが無戒破戒を許されようかと心得れば自然と如来の教に順ずる事になると云う。

三、持戒念仏助念の機

この機は念仏往生の道に助けとなる様に、身持心遣いするを云う。但し往生の助けではない。出離生死、往生成仏は念仏であつて、念仏を如法に相續させるものが持戒である。

四、持戒念仏遮惡の機

これは、惡事を避けて念仏申す機にして、如来の本願に善惡衆機の差別はないが、惡人は悲しみながら摂取され、善人は悦んで摂取したもう。されば念仏の行者は授受の作法によつて如来の御心を休め奉るものである。

五、持戒念仏助定の機

これは別時を修したく思う機にして、父母妻子の年忌追福をなし、仏祖の報恩を念じて、別時念仏を勤むるを助定の機と云う。

六、持戒念仏扶宗の機

出家の知識たらん人は、上来の諸義所説を熟知して、

自行化他をなせば自然と宗門を扶ける事になる。

(付、宗門の知識分上の僧は、西、鎮二流共に悉皆持戒の僧なるべし)(以上関全四 一二〇頁)

以上が所勸の六機として関通の云う所である。更に付加えて次の如く云う。

此説を信ぜず、行ぜず、無戒無修を専とせば、一念の邪徒はくみする因果撥無の外道なるべし。

これによつて関通の自説に対するなみなみならぬ信念がうかがわれる。特に一念義に対して批難激しく、かかる邪徒があるからこそ邪雜の道を分つて、一向專修の本願を信じ、但口称に往生決定せしめん為に授戒作法の結縁を設けるのだといい、戒を受けざる者は、無眼人なり、畜生に異なる事なし、木頭に異なる事なしとおとしめている。畢竟所誠の四機、所勸の六機は持戒に対する見解の如何に依つて分かれるものであるが、関通は結論として次の如く記したのである。

これは善導法語に当るなり、所誠は金銀の使ひやう悪ければ、現世には流浪し、来世には又墮獄す、故に

戒は受者の心期によると、所勸は金銀をよく使へば、富案安穩なりと教ゆ、予が意案は、つかはぬがよき也と存決したる也。

右に記す如く、予が意案は、つかわぬがよき也と云う心底には専修念仏者に対する各別の信賴がなされているのである。元祖の教に従つて念仏申す者が、盗や殺生をする筈がない。専修念仏の行者は自然と惡を慎み、自然と善事を悦び勸める行者である。どうして此等の人を破戒無戒の邪見人とし、放逸者といわれようかと云う純朴な考えであろう。されば又、次の如く記している。

爰に居乍ら極楽の聖衆の数に入りぬる身なれば、戒の持破に拘はらず、猶、②道共戒定共戒の機なれば、万事あしやうに心得てやめてやまる程の罪惡を止め、なせばなさる程の善事を修して、日々念仏相続し給ふべし、かく心得たる行者は自然と大乘修行の菩薩なり。(関全四 一二二頁)

かく見る時、関道の説く持戒はやめてやまる程の罪惡を止め、なせばなさる程の善事を修して、一途に口称

念仏に励進する事が即ちそれである。

ここで少し注意する事がある。関道の持戒に対する在り方は、出家と在家とは少しく異にするのであり、以上述べた所のものは在家衆に対してなされたものである。出家に対しては関道は律院建立等によつて強く持戒を主張するものであり、自らも厳格なる持律生活をなしたのであるが、その事は別項に譲る事とする。

註

① 所謂称念の主唱した捨世主義の一派であり、法然の教が曲げられるを良しとせず、名利を捨てて、専修念仏する自行策励と祖意を顕揚して化他に専心する所に面目がみられる。

② 道共戒、関全第四 一〇五頁(専修念仏持戒討論に云う、即ち、廢立為正の機なり、この機は、戒行に拘らず、只本願を頼み、称名するまでなり、……中略……これはこれ妙機感応、他力難思議と称すべし。